

第十五問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① 作品には浅いところから、ハモンのようにひろがつてくる声もあれば、深いところから井戸の底に誘いこむような声もある。浅い声はスムーズにはいつてきて快感のように滲みてゆくの、もしかすると気がつかないままに過ぎてしまう。意味や価値をみつけるまえに、作品の肉感を伝えたまま消えてゆくようなものである。

② 作品「走れメロス」の最後のところで、衣服が破れまっ裸になつて親友セリヌンティウス^{セリヌンティウス}の処刑場につけたメロスに、ひとりの少女が緋のマントを捧げる。そしてこの可愛い娘さんは、メロスの裸体を皆に見られるのがたまらなく「惜しい」のだ、とセリヌンティウスが気を、キかせて説明する。作者によって「勇者は、ひどく赤面した。」と書かれたとき、作品に意味や価値が与えられたというより、ただ作品に肉体が与えられただけなのだ。これは作品の浅い声だが、もしかすると太宰治の文学はこの浅い声にあるのかもしれない。かれがしきりに「心づくし」と呼んだものは、読者がそれを受けとることを拒否しても、なおただ作品の肉体でありつづける浅い声をさしているようにみえる。効果でありながら含羞や軽口や皮肉のように曲線を描いて、流れてゆくものに、読者は最初の印象が過ぎたあとですでに感染しおわっている。「みみづく通信」でもそうだ。わたしがはじめに聴いたこの作品の浅い声は、主人公が生徒たちに案内されて校長室に入つてきよろぎよろししていると、生徒たちが、以前にこの学校へ芥川龍之介が講演にきて、講堂のチヨウコクを

〔出典〕

吉本隆明

『悲劇の解説』

〔著者出題歴〕

・和歌山大学
・鹿児島大学
・上智大学
・明治大学
・立教大学
・南山大学
・広島修道大学
・西南学院大学

第十五問

③ 太宰治の作品のもっとも深いところからはひとつの声が聴こえる。じぶんは〈人間〉から失格している、じぶんは〈人間〉というものがまるでわからないと疎隔を訴えている声である。この声はかれが生涯の危機に陥ちこんだとき、かならず作品からしみでくる。けれど太宰治のいう〈人間〉は人間の本質をさしてはいない。他者の気持ちの動きがつかめないために他者との関係の仕方がまるでわからないと呼びかけている。他者に投影された人間の在り方からじぶんが異類のように隔てられているといった叫びに似ている。その果てに他者の振舞いは、じぶんの心の動きからまったく予測できないという失墜感があらわれる。こういった思ひは、生き難い時代に生きている実感からもやつてくるたろ。ま

褒めていったと説明する。何か褒めなければいけないとおもつて、あたりを見廻したが、褒めたいものもなかったという個所である。一瞬のうちに芥川が、かれの作品のなかに揺らめきで、すぐに皮膚の下に沈んでゆく。太宰の作品がもつこの滲透性を名づけるには言葉が微分されて意味を失うところというよりほかにないようにおもわれる。「東京八景」で、田舎者と笑われまいかとためらいながら東京全図を買い求めてきて、下宿の部屋をしめ切つてこつそりひろげ「赤、緑、黄の美しい絵模様。私は、呼吸を止めてそれに見入った。隅田川。浅草。牛込。赤坂。ああなんでも在る。」と「私」がかんがえるところにきて、誰もがそんな経験があるかのような感覚に誘われる喚起力が、かれの文学からも知れないのだ。だがそれはあくまでも浅い声である。それがかれの作品の声のすべてでないかぎり、もっと深い声のほうへ文学を超えて誘われてしまう。

③ 太宰治の作品のもっとも深いところからはひとつの声が聴こえる。じぶんは〈人間〉から失格している、じぶんは〈人間〉というものがまるでわからないと疎隔を訴えている声である。この声はかれが生涯の危機に陥ちこんだとき、かならず作品からしみでくる。

けれど太宰治のいう〈人間〉は人間の本質をさしてはいない。他者の気持ちの動きがつかめないために他者との関係の仕方がまるでわからないと呼びかけている。他者に投影された人間の在り方からじぶんが異類のように隔てられているといった叫びに似ている。その果てに他者の振舞いは、じぶんの心の動きからまったく予測できないという失墜感があらわれる。こういった思ひは、生き難い時代に生きている実感からもやつてくるたろ。ま

3

た他者との関係の仕方であちのめされた経験からも忍びこむにちがいない。そして人間は仮面をつぎつぎに身につけながら心の打撃に狂れてゆく。¹これが成熟の裏面についたカラクリである。太宰治にはこのカラクリが身についたことがなかった。かれが他者がまるでわからない、他者に投影された人間の在り方や、振舞いがわからないというとき、²いつも、はじめて打ちのめされたような、新鮮な恐怖と不信がつきまとっている。いわば絶対的に他者がわからないという、不安なおびえた表情がみえる。

⁴資質の限度を超えた力にひきずられて、不可抗的に作品の外へ連れだされてゆく人間の悲劇が作品から感じられるとしたら、作品の言葉が、ある絶対的な場所からやってくるからだろう。そういう作品に接したときは、じぶんの体験から作品をおしはかるといった読み方は成立しない。かりに成立つてもある処までそのさきはありきたりの類推はとどかない。わたしたちは仕方なしにこちら、側に帰ってくるが、作品はあちら、側に去ってゆく。作者もまたあちら、側に、厄病神のように追いやられる。それで優れた文学作品をめぐる作者と読者との関係はおわりだ。読者はいつも危険を「イ」むからだ。³だがあちら、側に去ってゆく作品や作家が他人事でなく気がかりだという読者は、かならずいるはずである。そうでなければ作品も作者もじつに哀れではないか。それらはただ紙の上で生き紙の上で死んでみせるだけなのだ。気がかりな読者だけは作品や作家の跡から見え隠れに。ピコウをつづけ、ついに行き倒れて朽ちてしまう姿を見とどけなければならぬ。かれにはみすみす死地の方へ歩んでゆく作品や作者を、こちら、側におしとどめる能力はないが他人事でな

い気がかりさえあれば、その死にざまを見とどけることだけ是可以。文学の周辺にはそういう悲劇的な関係の仕方も、ときにあるのではないか。

⁵太宰治は作品からうかがうかぎり、人間は不可解なものだという恐怖にとらえられ、ついにその恐怖から脱することができなかった。ひとは誰でも、じぶんの心と行動から他者を理解しようとし、その理解から人間と人間の関係の仕方を、少しずつおぼえこんでゆく。そしておぼえこみが深ければ深いほど、かれは人間にたいする洞察力が優れているということになる。おぼえこみが深くならなくてもそれに狂れば、人間通にはなれる。この世界を人間と人間との関係の仕方としてみるかぎり、成熟とはこのいずれかひとつを捉ふことをさしている。太宰治に悲劇があったとすれば、じぶんの心の動きから他者を推しはかれない点にあった。いくらやつても他者はじぶんとはまったく異なつた根から養分をとり、まったく異なつた原則で生きている異類としかおもわれなかった。この思いは生涯にわたって深まる一方であつた。かれの作品は人間洞察を深めてゆく成熟の道のりも、人間と人間との関係の仕方に狂れた風化への道のりをも示さなかった。最後まで人間がわからぬ、人間は怖ろしい、じぶんは人間から仲間外れになっている、という嬰兒のようなおびえのまま立ちすくんでいた。

35

40

45

50

55

60

65

2

7

傍線部 a ｾ のカタカナを漢字に改めよ。

問二 傍線部イ、ホの中で他と異質なものを一つ選び、記号で答えよ。

イ 〈心づくし〉
ロ 流れてゆくもの
ハ この滲透性
ニ 浅い声

ホ
この声

傍線部「これが成熟の裏面についたカラクリである」とあるが、筆者は成熟をどの

問四

【傍線部2「いつも、はじめて打ちのめされたような、新鮮な恐怖と不信がつきまとっている」とあるが、「はじめて打ちのめされたような、新鮮な恐怖」と同じ内容を比喩的に言い表した語句を本文中より十字以内で抜き出せ。

[illegible]

問五 傍線部3「悲劇的な関係の仕方」とあるが、それはどのような関係か。その説明として最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ紙の上でしか生死を表現できない作者とそれを読み込む読者との関係

破滅的な人生を突き進むしかない作者と、堅実な人生を選んだ読者との関係

ハ
ありきたりの生から離脱していく作者とそれを注視するしかない読者との関係

二 孤独だと思いつ込んでいる作者と自分の関心を伝えられない読者との関係

ホ、路上死の運命にある作者と追跡してその死を見届けようとする読者との関係

問六 太宰治の作品の説明として本文に合致するものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

イ 自由に表現し難い時代に創作されているため、読者へのメッセージが含羞や皮肉などで装っている。

口 感覚的な面白みを表現した浅い声と、論理的な人間考察を表現した深い声とが組み合わせられている。

ハ 浅い声と深い声にたとえられる二つの魅力があるが、前者は後者の要素を平易に表現したものである。

二 感受性を通じて心に染み渡る要素と共に、文学の領域に留まらない人間存在の問題までもが表現されている。

ホ 徹底的に自己の孤独にこだわることで、他者との疎隔に悩まざるをえない人間存在を象徴的に表現している。